人権ふれあい紙芝居「 もう、かみなりは落ちません 」原稿

暑い夏の日、津島村の与平さんは田んぼの草とりをしていました。

子どもたちは田んぼの手伝いもせず、魚やザリガニを採ったりして、もう顔も体も泥んこです。

と、空に黒い入道雲がむくむくわいてきました。まもなく、稲妻がビカビカ、かみなりゴロゴロ、雨つぶもおちてきました。

「くわばら、くわばら。あそこの氏神さまのところで雨宿りをさせてもらおうか。」

氏神さまには、野良仕事をしていたほかの村人らも雨宿りです。

あぜ道で遊んでいた子どもたちが、走り込んできました。軒下はもう一杯です。

せまい軒下は、「ワーワー、ギャーギャー」と大騒ぎになっています。

そのとき、雲の上では、かみなりの親子がこんな話をして。

「おとう、みんなこわがって氏神さまに集まっているよ。」

「もっと、こわがらせてやろう。わしは土砂降りにするから、おまえは大きな音を出すんだぞ」

「うん、わかった。」

「あんまり小さい音だと、ほかのかみなりに笑われるぞ。」

「よーし、がんばって大きな音を出すぞ。」

子どもかみなりは、手をふりあげて、太鼓を思いっきりたたきました。

「ドーン、ドドドドドーン、ドン、ドン、ドドドーン」　もう大暴れです。

と、あまり力を入れすぎたので、その拍子に足をふみはずして、雲の上から地上へころげ落ちてしまいました。

ドドドッ、！　ガラガラ、ガッシャーン！

氏神さまに集まっていたみんなは、音にびっくりして思わず目をつぶりました。

「なんだなんだ、」　「何が起きただ。」

こわごわ周りを見わたしてみると、境内に子どもかみなりが倒れているではあり。

「アッ、かみなりどんだ！　こいつがみんなをおそがい目にあわせたんだ。悪いやつだ！」

「つかまえろ。つかまえろ！」

みんな、どっと子どもかみなりを取り囲みました。

「あんばよう、そこに金だらいがある。それをかぶせやあ。」

子どもかみなりは、かんたんにつかまってしまいました。

こどもかみなりは真っ暗な中に閉じ込められて、とても怖くなってきました。

「えーん、えーん」

金だらいの中で、泣きながらいいます。

「わーん、わーん。たすけて。」

「いや、だめじゃ。またどっかの家におちて火事をおこすかもしれん。」

いつもかみなりにビクビクしている村人が怖い顔をして言いました。

「そうじゃ、そうじゃ。」　「そうじゃ、そうじゃ」

子どもたちは、金だらいの上をバンバン、カンカンたたきます。

「うえーん、ゆるして、ゆるして ～　エーン、エーン」

子どもたちは、金だらいに閉じ込められて、泣き叫ぶ子どもかみなりを大勢でいじめて喜んでいます。

金だらいの上をさらにバンバン、カンカンたたいています。

子どもかみなりは大泣きです。

このまま、死んでしまうと思いました。

与平さんは、子どもかみなりがちょっとかわいそうになってきました。

「もう、おきゃあ。そう、いじめたらあかん。かねしたれ。親かみなりも雲の上で心配しとるじゃろうて。」

「甘いこと言っとったら、あかすか。去年も村にかみなりが落ちて家が焼けてまったでないか」

「そうじゃ、。」

「まあ、待て。かみなりはおそがいが、雨を降らしてくれる。田んぼにとってはありがたいことじゃ。そうだろ、みなの衆。」

そうです。夏の日照りが続き水不足になる津島村の田畑も、たまに暴れ回るかみなりの夕立のおかげで、何度も助けられていたのです。

「そりゃ、雨はありがたい。でも、かみなりはごめんじゃ。」

与平さんは、雲にむかって大声で呼びかけました。

「おお～い、かみなりさまよ、聞いとるか～。」

返事をするかのように、「ド～ン」と、太鼓の音がしました。

「子どもを返したるから、これからは、この津島村にかみなりを落とさんでくれるか。」

雲の上のおやじかみなりは、約束のあかしのように太鼓の音をやさしく「ト～ン、ト～ン」と鳴らしました。

「どうじゃろ、みなの衆。子をおもう気持ちは人間もかみなりもいっしょだ。もう、落とさんと言っとるし、返したろまいか。」

「そうだな かわいそうだよ。もう かねしたろ」　子どもたちもいいます。

さっきまで、金だらいを叩いていた木の棒をその場にほかりました。

村の衆も、うなずきました。

「ここは、かみなりさまの約束を信じよまいか。」

「もう、かねしたろ、かねしたろ。」

与平さんは、金だらいを そおっと とりました。中にいた子どもかみなりは、ケガもしてないようです。

怖かったのか、小さく丸まってブルブル震えています。

「もう戻っていいぞ。ただ約束だけは守ってくれるように、おやじどんに伝えてくれよ。」

子どもかみなりは、安心しました。涙を拭いて、大きくうなずきました。

「はい、わかりました。この村には落とさないよう、ほかのかみなりにも伝えます。」

「そうか、じゃあ空へもどっていけ。」

「ありがとうございます。りっぱなかみなりになります。」

村人たちは笑って、

そうじゃ、そうじゃ！」　そうじゃ、そうじゃ！」

わーい、りっぱなかみなりだ！」

「雲から落っこちるような弱虫かみなりになるなよ。」とはやしたてました。

子どもかみなりは、空にむかってすっ飛んで、おやじかみなりのもとに無事にもどれました。

おやじかみなりは、しっかりと子どもかみなりを抱きしめました。

「心配したぞ。無事にもどってこられてよかったな。」

「村の衆との約束をまもってあげてね。」

「わかった、わかった。この村には雨は降らしても、かみなりは落とさんぞ。」

「わしらを許してくれたこの村の衆たちに、悪さはできんでな。かみなり仲間にも、今日のことを話して、これから津島村にはかみなりを落とさないよう頼んでおこう」

かみなりの親子は、村人との約束を誓いました。

子どもかみなりのあたまをなぜながら、ふたり仲よく多度山のほうに飛んでいきました。

すると、今まで曇っていた村の天気も、すっかり晴れ渡り、暑さが戻っていました。

それからというもの、津島村にはかみなりが落ちないようになりました。とさ。

おわり